達海頭

○命慰勞

誠惶誠恐

の文字の見ゆるものありて、李柏が西に來れるは諸國慰勞の爲なること明らかなり。因て思ふに此行或は趙貞征伐のことに關して、焉耆が援助をなせし等の爲か、或は使を以て勝を祝せしが如きことありて、爲に李柏が命を奉じて其勞を慰するものにはあらざりしか。もとよりたゞ趙貞の名よりしたる想像にすぎざれども、焉耆と高昌との地が隣接せるよりして、また朝家慶あれば藩屬之を祝するの常なるよりして、「王使迴復羅從北虜中與嚴參事往」の辭を見る時は、此想像も必らずしも不稽の甚しきものにはあらざるべし。かゝる考より之を見る時は、此五月七日なるものは趙貞の降伏せし年或は其翌年卽ち咸和三年より五年に亘る間の一年に置くことを得べきか。もし然らずとするも、趙貞の事件を去ること遠きには非ざるべし。

卽ち此文書に見ゆる五月七日は咸和三、四、五年頃（西紀三二八―三三〇年頃）のものなるべし。

文に「月二日到此」と記し、「此」字の傍に「海頭」と記せり。これ此文書を草せし地が海頭なるを證するものといふべし。海頭の文字は別の一葉及び先に揭げたる斷片にも見え、もとより羅布泊（Lop-nor）頭の意に外ならざるべし。或は焉耆卽ち今の哈喇沙爾（Kara-shar）附近には、大澤巴格喇赤庫里（Baghrashkul）卽ち一に博斯騰淖爾といひ、水經注等には敦薨と稱するものゝ存するあれば、必らずしも羅布泊を限る可らずといはんも、然も往昔巴格喇赤を呼びて或は浦といひ、或は藪といひ、或は渚と稱するものはあれども、未だ海といふものあるを知